HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	熊野 純彦「ヘーゲル(他なるもの)をめぐる思考」
Author(s)	高田, 純
Citation	哲学, 39, 89-96
Issue Date	2003-07-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/48038
Type	bulletin (article)
File Information	39_89-96.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

《書評》

熊野純彦『ヘーゲル〈他なるもの〉をめぐる思考』（筑摩書房）

高田　純

一　はじめに

著者はレヴィナスの解説書（『レヴィナス入門』筑摩書房、『レヴィナス』岩波書店）で知られるが、広い分野にわたって仕事をしてきた。近著には『カント』（日本放送協会出版）もある。じつはそのなかで著者が学生時代から持続して取り組んできたのはヘーゲルである。その意味で今回の著作は長年の仕事の集大成であるといえる。ヘーゲル研究書は多くのばあい、一つのテーマについての体系的な考察や、形成史を追った文献的解釈であるか、著者の問題意識に従った自由な解釈であるかであるが、本書のスタイルはこれらとは異なる。いくつかのテーマが峰として設けられ、そのふもとに箱庭のような風景が作られる。読者はこれらの峰を眺めながら、全体を展望する楽しみを味わうことができるよう工夫されている。しかし、このようなスタイルについては評価が分かれるかもしれない。あるテーマについてヘーゲルの特定の時期のテキスト（初期、『精神現象学』、後期）が重点的に取り上げられるが、このテーマについてヘーゲルの思想に変化や

発展がないのかどうかが問題となるだろう。また、中心的な論点についての記述は比較的簡潔であるため、立入った説明を求めたくなるばあいもある。

本書は、第一章「生成する真理」、第二章「歴史　理性　他者」、第三章「他者という問題の次元」、補論一「ヘーゲル反省論の位置」、補論二「差異という始原について」からなる。本書の副題は「〈他なるもの〉をめぐる思考」となっている。このテーマに直結するのは第二章と第三章であるので、今回の書評はこれら二章を主な対象とする。このテーマは評者も強い関心を寄せ、これまで評者なりのヘーゲル理解を述べてきた経緯もあり、問題の布置状態を確認しながら、コメントしたい。

Ⅱ　理性の暴力性をめぐって

1　理性の暴力性とはなにか

近代的哲学における理性は現実を改造する機能をもつと信じられてきたが、現代においては理性がこれに反して暴力性をもつことが批判されるようになった。ヘーゲルは、ある意味で近代的理性を頂点に高めたわけであるが、このためまた理性批判の標的とされる。ヘーゲルにおける理性をどのように評価するかは、ヘーゲル解釈の大きなアクチュアルな問題である。暴力は、〈他なるもの〉を排除したり、支配したりすることを意味する。ヘーゲルにおいては、理性は全体構造や歴史過程を統合し、制御する機能を与えられており、この機能がどの点で暴力性を帯びるのか論点となる。

「他者において自分のもとにあること」「他者において自分を認識すること」がヘーゲルの基本的立場であるが（一〇頁、六九頁）、彼にあっては理性も、さらにいえば理性こそ「他者において自分のもとにある」ことを本性とする。ここでは、

自己と他者のあいだの弁証法的関係が問題となる。一方で、自己は他者とは区別され、さらに対立さえする。しかし、他方で、自己は他者なしには存立できず、他者と不可分である。　しかし、対立（区別）と結合（同一）との統一（同一性と非同一性との同一性）は危うい。「他者において自分のもとにある」というばあい、「他者において」という面と、「自分のもとにある」という面とのいずれを重視するかによって、見解は分かれてくる。近年のヘーゲル評価は、理性がその他者のなかに自分を貫き、これを自分に統合するという面を強調して、その暴力性を批判する方向に傾斜している。この点について著者の見解はどうか。第二章の副題は〈ヘーゲルにおける「理性と暴力」をめぐって〉となっているだけに、結論を知りたいところであるが、著者は直接に結論は示していない。この点で注目したいのは、著者が末尾で、ヘーゲル哲学は「〈異〉と〈非同一性〉との思考」（二八二頁）であると著者が述べていることである。このような評価が理性にも妥当するとすれば、理性の再評価の新しい方向が開かれることになる。

2　啓蒙的理性の限界の克服はどのように可能か

ヘーゲルは啓蒙的理性とヘーゲル固有の意味での理性を区別する。啓蒙的理性の限界は、著者も述べるように、他者のなかに自分を見出すことができなかった点にある。このため、啓蒙的理性は他者に対する暴力へと転化した。それは、『精神現象学』で示されるとおり、フランス革命のなかで具体的な形で現れた（一二四頁）。フランクフルト学派は、啓蒙的理性が暴力へ転化することを鋭く指摘した（アドルノ、ホルクハイマー『啓蒙の弁証法』）が、ヘーゲル的理性も大局的には啓蒙的理性の限界をのり超えることができなかったと結論づける。つまり、ヘーゲルは「同一性と非同一性との同一性」の理解のばあいに、非同一性の立場を貫かず、非同一性を同一性に解消したと批判する。第二章の二は「啓蒙の弁証法」と題されているが、著者のヘーゲル評価はフランクフルト学派とは異なるように思われる。

ここで、啓蒙的理性がなぜ暴力性をもつのかをあらためて問いてみたい。そのいつかの異なった側面が区別されるべきであろう。それらは理論的側面、実践的側面、歴史的側面に大別できる。啓蒙的理性はヘーゲルの一般的な用語では「悟性 Verstand」であり、本来の「理性 Vernunft」から区別される。悟性の機能は分析、抽象化にある。悟性は、連関したものを引き離し、具体的なものから普遍的なものを抽出する。悟性は全体的なものをとらえることはできない。悟性は連関や統一を、区別されたものの外部から持ち込まざるをえない。認識の次元でもすでに強制や暴力が作用するのであり、それらは実践に転化するときいっそう顕著になる。ところで、ヘーゲルは、悟性のこのような立場が近代社会（市場経済を基礎する市民社会）における分裂を背景とすると指摘する。この分裂は暴力性を含むが、悟性がこの分裂を解消しようとすることもまた暴力的におこなわれざるをえない。このような悟性の限界を克服することがヘーゲルのライト・モチーフであった。

著者は第二章で理性の暴力に関連して、「理性の狡知」を扱っているが、これが理性の暴力性の克服の展望とどのように結びつくのかが必ずしも明らかでないように思われる。著者は、理性の狡知は「他者において自分を認識する」ことにあると述べるが（一〇一頁）、その内容に言及していない。著者は理性の狡知を労働の場面と歴史の場面に認める。前者のばあいは、人間が道具を事物とのあいだに差し込み、事物に対する働きかけを道具に任せることによって、自分は苦労することなく、事物を自分の意志に従って変化させるのであるが、ここに理性の狡知が現れる。事物は自然の威力（必然性）によって支配されるが、労働主体は事物の直接的関係から身を引くことによって、暴力から身を守るという面に著者は注目する。（九八頁以下）。しかし、理性の狡知にはより積極的な機能もある。ヘーゲルは、対象に対して外部から暴力的に働きかけるのではなく、内在的に働きかけをおこなううえで理性の狡知を重視している。それは、対象の潜在力を引き出し、活性化することにあり、道具はそのために利用される。この態度は対象を一方的に支配するのではなく、対象を

熟知し、それと一体化することを含む。

3　歴史的理性の暴力は克服可能か

著者は歴史の場面では一転して、理性の狡知の暴力性を指摘とする。ヘーゲルによれば、歴史はその「目的」を幾多の人間や集団の犠牲をつうじて実現していく。歴史においては人間や集団の行為の結果は、意図したものと異なるばあいが多く、成功や失敗は歴史の運命によって左右される。このような見方は、歴史を超人間的なものとみなすもので、人間不在であるという批判が強い。歴史が超人間的なものとして現れないようにするためには、歴史法則を認識可能となり、透明化されなければならないというのがヘーゲルの結論である。ただし、歴史法則が認識可能になるかどうかはそれ自身歴史によって条件づけられる。ヘーゲル以前においては、歴史を透明化すること（廣松渉氏が好む表現では歴史の「物象化」の克服）は不可能であった。ここに歴史における暴力性の別の意味がある。ヘーゲルは、自分の時代が「歴史の終わり」にさしかかっていると考えたが、その段階では歴史の「物象化」の克服が可能となるのかどうかを明らかにしていない。著者は、人間が歴史に所属し、歴史が自分にとって他者でありつづけることを人間が承認することが重要であると述べるが（二〇七頁）、歴史が物象性を残すとすれば、歴史の暴力は除去できないことになり、歴史的理性も暴力性を克服できないことになる。

III　他人の承認をめぐって

1　他者の存在論

ヘーゲル哲学においては、他者にはいくつかの異なった段階がある。まず、万物の実体である絶対者にとっての他者があるが、この他者はまず個物（個別者）であろう。個物の次元では、他者は他の個物を意味する。人間のあいだでは他者は他の人間（他人）にほかならない。人間の生活においては、「他者のなかで自分を認識する」という相互関係は「相互承認」という形をとるが、その根底には、実体の個別にたいする関係、個体の他の個体の関係がある。まず、絶対者（普遍的なもの、無限なもの）は個体（有限なもの）をつうじて現れる。絶対者の有限化を無視することは、個体を絶対者に解消させることにつながる。ヘーゲルはスピニザやシェリングの実体には個体が欠けていることを批判し、実体論をライプニッツのモナド論やフィヒテの自我論と結合しようとした。この面について著者は直接言及していない。

ヘーゲルは実体と個体の関係と個体相互の関係をまず存在論的にとらえている（論理学の対象）。著者が人間における相互承認の「論理学的基底」をこの他者の存在論に求めていることは的確である。ヘーゲルを頂点とする近代哲学が「存在忘却」に陥ったとハイデガーが批判していることを念頭において、ヘーゲルが〈存在すること〉そのものをその他者との関係においてとらえようとしたことに著者は着目する（八一頁）。著者が扱っているのは個体相互の関係である。論理学の「有（存在）」論で、あるものは他のものから独立にそれ自体で存在する（即自存在）と同時に、他のものに対して存在する（対他存在）と述べられていることに著者は着目する。この箇所はヘーゲルの存在観を示すものとしてしばしば引き合いに出される。「有」論は存在のあり方を抽象的に述べているにすぎず、本来の個体はまだ登場しないが、すでにこの次元で他者関係が存在にとって不可欠であることが示される。ところで、著者の主張の特徴は、それぞれの個体が

「イデア」を分有することによって個体相互の関係が成立しているとみなす点にある（一四六頁）。これはプラトンとアリストテレスの伝統に立ち返って個体の問題を考察するもので、哲学史的には貴重である。しかし、ヘーゲル自身が「イデア」をどのように理解しているかを離れて論じることには問題が残る。ヘーゲルのばあいは「イデア」は「イデー（理念）」となり、ここから彼固有の意味での「イデアリスム（観念論）」が生じる。個体の問題を論じるためには、「概念」論の理念の部分を扱うのが最も適切である。なお、ライプニッツを意識した実体と個体の関係については『イエナ論理学・形而上学』（一八〇四・〇五年）に興味深い説明がある。

2　他者の承認はどこまで可能か

第三章で著者が主題としているのは人間世界における相互承認である。このテーマは評者も長年扱ってきたもので、詳しくコメントしたいところであるが、残された紙幅は少なくなった。ヘーゲルは、個人の存立のためには、他の個人が不可欠であること、他人に対する関係は支配の関係ではなく、承認の関係でなければならないことを明らかにした。ヘーゲルは他者論や相互主観性論の先駆となるものを唱えたといえる。著者はこの点を『精神現象学』と初期の著作を主なテキストとして説得的に解説している。ところで、近年ヘーゲルの承認論が注目されるなかで、その限界を指摘する傾向も強まっている。他者はそもそも簡単に理解できるものではないという意見は別として、ヘーゲルのばあいは、自他の共通面（普遍面）が強調されるため、自他を区別する個別性そのものが軽視され、さらに自他の関係が共同体（人倫的実体）に解消されているという批判が出される。ハーバーマスのヘーゲル批判もこの種に属する。広い意味では、近代哲学には普遍主義がある。ヘーゲルのばあいこれが共同体（国家）優位の思想として具体化される。レヴィナスは自己に引きつけ収められない「他者の他者性」を正面から問う。類似の他者論はブーバーやマルセルなどにもみられる。評者の最大の関心

の一つは、レヴィナスのよき解説者でもある著者がヘーゲルの他者論とレヴィナスの他者論の関係をどのように理解するかにある。単純化すると、他者の他者性がヘーゲルにあるのかないのかになる。すでに触れたように、著者はヘーゲルのなかに「〈異〉と〈非同一性〉の思考」を読み取ろうとするが（二八二頁）、この思考は他人に対しても妥当するのであろうか。承認という言葉がもちがちな「過剰に調和的な響き」に著者は警戒し、一方的承認（支配）の挫折をつうじて他者の存在の意味が明らかになると述べるが（一七六頁）、ここで開かれる他者の意味はどのようなものなのか。

3　共同体と歴史の悲劇は不可避か

最後に、歴史における暴力と関連するが、共同性の暴力について著者の見解を質したい。著者は、承認とは最終的には、「自己が他者とともに歴史に内属していること」の承認にほかならないと述べ（二〇七頁）、また、共同体と歴史には悲劇がつきまとうという（一〇〇頁）。しかし、ヘーゲルは古代ギリシアの悲劇を念頭において、共同体と歴史における悲劇について語っているのであり、ヘーゲルが構想する共同体も悲劇をともなうとは考えていないであろう。評者としては個人の他の個人に対する、および共同体に対する能動性のほかに受動性（フォイエルバッハの用語を借りると、「受苦性」）を重視したいが、このような受動性＝受苦性を直ちに悲劇性、暴力性と性格づけることには疑問を感じる。

いずれの問題にしても、著者の視点は根本的かつアクチュアルであり、現代にとってのヘーゲル思想の意味を鋭く問うていることは、ヘーゲル研究の新しい動向を切り開くものである。ヘーゲル思想の内在的考察と同時にそのアクチュアル化について、著者のさらなる仕事を期待したい。

（二〇〇二年　二九一頁＋xvii）